



© 2025 "She Taught Me Serendipity" Film Partners

She Taught Me Serendipity

今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は

2025, 127 min, English subtitles

Director: **OHKU Akiko**

Cast: HAGIWARA Riku, KAWAI Yuumi, ITO Aoi, KUROSAKI Kodai

【ネタバレ注意】

『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』は、お笑いコンビ「ジャルジャル」のひとりである福德秀介が2020年に発表した同名の小説の映画化である。大九明子監督は20代前半から中盤まで本気でお笑い芸人を目指していた時期があり、映画監督になってからも多くのお笑い芸人をキャストとして起用し、また、シソンヌ・じろうとは『勝手にふるえてろ』、『美人が婚活してみたら』、『甘いお酒でうがい』の3作で脚本家として招き入れ、現在の日本映画界において、繊細さとユーモアのバランスが卓越した世界観で独特の地位を築いている。

同時に、大九監督の作品に通底するのは、他者から自分がどう見られているかという眼差しに敏感で傷つきやすい主人公の境遇を決して否定せず、その心境に寄り添って描くこと。彼、彼女たちは外界から受ける痛みへの感受性が強く、理不尽な状況に対して反論したり、説明する前に、言葉を飲み込んで、深く内省してしまう若者たち。大九監督は『勝手にふるえてろ』（2017）が第30回東京国際映画祭のコンペティション部門で観客賞を、『私をくいとめて』（2000）が第33回東京国際映画祭の同じくコンペ部門で観客賞を二度受賞している。このような熱い反応は、大九監督が観客の目線に近い映画監督であることの証だろう。

さて、『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』は、前出する福德の卒業した関西大学に協力を得て、多くの場所を同大学に借りて撮影されている。

萩原利久演じる主人公の小西徹は大学の一年の時、祖母を亡くしたことをきっかけに大学を半年間休学し、2回生の始まる春、キャンパスに戻ってきたところから物語は始まる。大学の正門から長い坂道を上り、講義室に行くまでの距離を、彼は他人からの眼差しを遮断する傘を差さずには歩けない。広いキャンパスでは、友人たちと賑やかに談笑する学生たちが溢れるが、小西には友達といえる存在は山根（黒崎煌代）しかおらず、学外ではアルバイト先である七福温泉のオーナーの佐々木（古田新太）、その娘の夏歩（松本穂香）、そして深夜の風呂掃除を共にするさっちゃん（伊東蒼）が気の置けない存在となっている。

そんな小西がかねてから気になっているのが、キャンパス内で誰とも蒸れず、常に一人で堂々と行動しているお団子頭の桜田花（河合優美）である。ある日、小西と桜田の距離がぐっと近づく瞬間がやってくる。同じ授業ととる小西は自分の出席届を桜田に出してもらうように依頼し、その次の週の雨の日、自分のお気に入りの裏道を彼女も使っていると知り、思い切って声をかける。その時、彼女から自分の名前が認識されているとわかった瞬間、横長のワイドサイズのスクリーンが正四角形に近いヴィスタサイズへと変わる。

| Dates & Venues | NB: Dates may vary |
|---|---|
| 11 February – 20 March Aberystwyth Arts Centre, Aberystwyth | 16 February – 2 March Macrobert Arts Centre, Stirling |
| 7 February – 28 March Brewery Arts Cinema, Kendal | 6 – 8 February Manchester Film Weekender, Greater Manchester |
| 6 – 12 March Broadway, Nottingham | 20 – 26 March Midlands Arts Centre, Birmingham |
| 14 February – 15 March Chapter, Cardiff | 9 February – 28 March Phoenix, Leicester |
| 10 February – 23 March Chichester Cinema, Chichester | 1 – 31 March Picturehouse @ FACT, Liverpool |
| 1 – 31 March Cinema City Picturehouse, Norwich | 5 – 26 March Plymouth Arts Cinema, Plymouth |
| 1 – 31 March City Screen Picturehouse, York | 15 February – 29 March QUAD, Derby |
| 23 February – 11 March Depot, Lewes | 7 February – 28 March Queen's Film Theatre, Belfast |
| 20 February – 22 March Dundee Contemporary Arts, Dundee | 18 – 27 February Riverside Studios, London |
| 7 – 28 March Exeter Phoenix, Exeter | 16 February – 26 March Showroom Cinema, Sheffield |
| 12 – 19 March Filmhouse, Edinburgh | 8 – 25 February Storyhouse, Chester |
| 7 February – 29 March Firstsite, Colchester | 8 February – 15 March The Dukes, Lancaster |
| 12 February – 10 March HOME, Manchester | 2 – 26 March The Phoenix Cinema, Kirkwall (Orkney) |
| 8 February – 3 March Hyde Park Picture House, Leeds | 10 February – 3 March The Ultimate Picture Palace, Oxford |
| 6 – 15 February Institute of Contemporary Arts (ICA), London | 10 February – 30 March Tyneside Cinema, Newcastle upon Tyne |
| 14 February – 28 March Jesus College/ Panorama, Cambridge | 16 February – 17 March Warwick Arts Centre, Coventry |
| 6 March – 27 March Leigh Film Factory, Greater Manchester | 7 – 17 February Watershed, Bristol |

Major Supporter



Sponsors in Kind



Clearspring Pentel

Cultural Partner



徹の見ていた景色において、花の存在がにわかになり、二人を取り巻く世界がコンパクトで親密な空間へと変わったことを、大九監督はスクリーンサイズの鮮やかな転換で演出するのだ。

この後、急速に小西と桜田は急速に仲を深めていき、互いの苦手なこと、好きなことを確認しあう中、多くの共通点を見出し、小西を有頂天させる。小西が桜田に心を奪われていることを察したさっちゃんは深夜の告白をし、玉砕。小西は山根との関係性も大きく崩れていく。全方位に満遍なく友情や愛情を注げるマルチタスクのパーソナリティではない小西の不器用さをさっちゃんと山根は理解し、そこに行きを持っていくが、そのアンバランスさから小西とさっちゃんは傷つくことになる。学生時代にありがちな光景だが、大九監督はそれは個人にとっては人生を変えてしまう大きな出来事として壊れ物を扱うかのように丁寧に演出する。前半のクライマックスは、さっちゃんによる深夜の小西への恋心の告白だが、壮絶な長台詞をワンシーンで演じ切る伊東蒼の巧みな演技と、その熱情は公開当初から大きな反響を得て、第35回TAMA映画祭の特別賞、第47回ヨコハマ映画祭助演女優賞、第49回日本アカデミー賞特別賞を受賞している。また、長台詞による登場人物の本音の発露は、ラスト近くの萩原演じる小西、桜田演じる河合も凄まじい集中力をもって挑んでいて、『見はらし世代』でも好演を見せた山根役の黒崎も含め、若手の実力派が揃って、スリリングな演技を応酬しあっている。

さて、本作においてもひとつ記しておきたいのが、小西と桜田が初めて会話を交わす授業の内容として、BGMのように観客に微かに耳に届く教授の講義の内容はHSPであるということ。HSPとは1996年にアメリカの心理学者であるエイレン・N・アロン博士が提唱した「生まれ持った神経の性質」を指し、ハイリー・センシティブ・パーソン (Highly Sensitive Person) の略。音や光、匂いなどの些細な感覚刺激に敏感で、感受性の高い神経の性質を持った人を指し、臨床心理学の診断科目ではHSPは治すものではなく、個性のバリエーションとして扱われている。小西と桜田がお互いに共感しあうものの捉え方の中に、音への敏感さがあり、ふたりは大学の授業の合図であるチャイムの音の大きさに違和感を持ち、平地にある教室から随分と高い場所で聞くとちょうどいいなど、聴覚に過敏な傾向があることで共感しあう。一方、さっちゃんは軽音楽部に所属し、日々、エレキギターをかき鳴らし、バンドの爆音に強い耐性を持っており、人気バンドのスピッツの「初恋クレイジー」を小西に薦めてもなかなか聴いてくれないことを、自身への関心の低さとしてとらえていたが、大九監督は、小西とさっちゃんの間には、サウンドへの捉え方に大きな個人差があり、それが互いに理解しあえぬ断絶となっていることをそれとなく指し示す。

恋心が叶わぬ理由の背景にある感覚の違いを明らかにしているから、この映画は新しい領域の若者の肖像画となっているのだ。

金原由佳

映画ジャーナリスト

Copyright belongs to the Japan Foundation. You may not copy, reproduce, distribute, modify, or distribute any part in any form without permission. Any errata are the responsibility of the Japan Foundation.